狙われた学園、
侵入者の性処理優等生

小説モーメント

私立天音学園、２年Ａ組。生徒たちは、明後日の学園祭の準備で躍起になっていた。クラスは出し物の飾り付けが終わり、その中で一人だけ、机に突っ伏している少女がいる。彼女の名前は、波村由里。彼女はこのクラスで一番成績が良く、学級委員長も勤める真面目な少女だ。

「由里！」

その声を聞いて、由里は顔を上げる。そこにはクラスメイトの少女、赤嶺舞の姿があった。

「どうしたんですか？　机に突っ伏したりして……みんな学園祭の準備しているんですよ？」

そう言って微笑むと、由里の前の席に座ってくる。

「えぇ……分かっていますわ」
「だったらしっかり起きていてくださいね。　学園祭当日になって、準備をしていないなんてことになったら目も当てられませんよ？」
　クスリと笑うと、舞は立ち上がって教室から出て行こうとする。その時、由里が呼び止める。
「ちょっと待ってくれません？」「何ですか？」
「あの……」
　由里は顔を赤く染めると、口ごもりながら言った。
「私……最近、お腹の奥の方がムズムズするのですけれど……何か病気でしょうか？」
　舞はそれを聞くと、一瞬キョトンとした表情を浮かべた後に笑った。
「ふっ……あはは！　大丈夫ですよ、そんな心配いりません。それはきっと……」

そして舞は由里の耳元で囁(ささや)いた。
「性欲が高まってるだけですから」そう言うと舞は立ち上がり、教室を出て行った。
それを聞いた由里は、恥ずかしさでまた机に突っ伏してしまった。
(うぅ〜、やっぱりそうなんだわ……。でもどうしてこんな時に……)
二年A組はメイドコスプレで喫茶店をすることになったのだ。そのため女子は衣装を家庭科室で仕立てているところだ。
由里は学級委員長であるため、クラスの出し物の出来映えを見なくてはいけない。
辺りは、すっかり夕暮れ時。
由里はここ数日の間、欲求に悩まされていた。
(……したい。シたい。シタい!!)
頭の中ではその事しか考えられず、勉強にも集中できない状態が続いて